



日本発のスマート社会モデルを全世界へ

砂田 薫 (すなだ・かおる)

国際大学 GLOCOM 主任研究員 / FTM フォーラム プロジェクトリーダー

技術とイノベーションを根本から見直す

——技術によって社会と人類に大変革をもたらすイノベーションは、情報通信領域に次いでエネルギー領域が焦点になる。全力を挙げてエネルギー、とりわけ電力の改革をイノベーションの最重点課題にすべきである。

——イノベーションを通じて持続可能性と豊かさを両立させる社会を、我々は「スマート社会」と位置付ける。

国際大学 GLOCOM の「フューチャー・テクノロジー・マネジメント (Future Technology Management: FTM) フォーラム」(議長: 村上憲郎・国際大学 GLOCOM 教授, Google 日本法人元社長・前名誉会長) で議論の中心となっている有識者 11 人は、2012 年 4 月、「持続可能なスマート社会づくりを急げ—電力改革をイノベーションの最重点課題に—」と題した提言を発表した(提言全文は <<http://www.glocom.ac.jp/project/ftm/information/proposal120424.html>> を参照)。冒頭の文章は、提言要約の一部である。

FTM フォーラムは 2011 年 10 月に発足した。その 7 か月前、東北地方は未曾有の地震と津波に見舞われ、福島原子力発電所では大事故が発生した。国際大学 GLOCOM では 2006 年度から日本企業の技術戦略や国家の技術政策について定期的に意見交換を行う「CTO (技術担当役員) ラウンドテーブル」を開催してきたが、原発事故の直後に参加メンバーから、技術と社会の未来を考えるオープンな議論が今こそ必要なのではないか、とくに電力改革を中心とするエネルギー問題は緊急か

つ重要な課題として議論を深めるべきだ、という意見が出された。これが契機となって、FTMフォーラムの発足へとつながった。発足の趣意に、「日本を覆う閉塞感を打ち破り、技術やイノベーションのあり方を根本から見直して未来を切り拓いていくために、また長期的観点から多様な人々が幸せになる社会を構想するために」という文言を入れたのはそのためである。

FTMフォーラムの活動は、二つのラウンドテーブルと二つのワークショップで構成されている(図1参照)。

「レッドテーブル」は、CTO経験者をはじめとする有識者のラウンドテーブルで、提言作成の中心メンバーによって構成され、「スマート社会ワークショップ」と並行してエネルギー問題を中心にスマート社会を支えるテクノロジーについて議論を重ねている。2012年4月の提言では、再生可能エネルギーの成長を促し、より自由でオープンな電力市場をつくっていくべきであるというエネルギー政策の大きな方向性を示したが、2013年4月にはそれを具体化するための提言を発表する予定である。そして、最終的なゴールとして、2014年4月には日本発のスマート社会のビジョンとモデルを示す提言を出したい。日本には、環境や省エネルギーの分野で世界をリードするテクノロジーがある。自然を克服すべき対象とみなすのではなく、自然と共生していくという伝統的な価値観と美意識がある。持続可能性と豊か

図1: FTMフォーラム「日本のスマート社会を構想する」

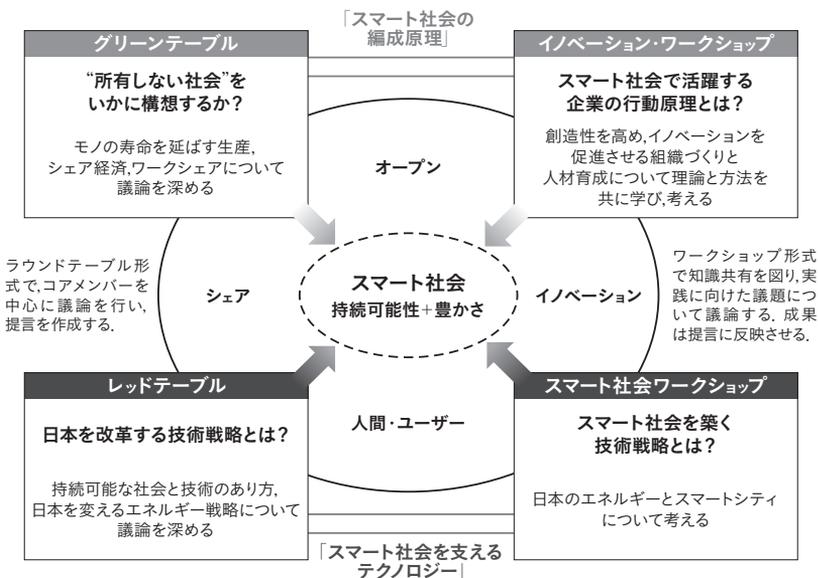


図2:レッドテーブルの議論



さを両立させるスマート社会の日本モデルを世界に広く発信することができれば、世界に対する日本の貢献であると同時に、競争力の向上にもつながるはずである。

スマート社会の編成原理と企業活動

スマート社会の日本モデルを強く意識する一方で、技術と社会のグローバルな歴史的变化を理解することも重要であろう。工業経済から知識経済へと移行し、さらに知識経済が成熟する段階としてスマート社会をイメージしてみるならば、社会の編成原理は根本から変化していくと予想される。

30代を中心とする若手ビジネスリーダーやオピニオンリーダーが議論メンバーとなっている「グリーンテーブル」では、「シェア」をキーワードに未来のスマート社会像を構想している。工業経済では、生産と消費が分離され、所有が豊かさの指標になった。しかし、もはや現実には生産と消費の境界が薄れつつあるうえ、これからは所有よりもシェアが人びとを動かす原理になるかもしれない。

また、スマート社会に向けて、企業の行動原理も根本から変わっていく。すでに多くの識者が、日本企業は伝統的なクローズドイノベーションから脱皮してオープンイノベーションへと変わるべきだという意見を表明しているのもその表れだろう。また、近年では伝統的な左脳型の「ロジカル思考」に対して、右脳型とでもいうべき「デザイン思考」の重要性が指摘され、多くの企業が注目するようになってきた。

図3：イノベーション・ワークショップ



「イノベーション・ワークショップ」では、具体的な企業のケーススタディを通じて、このようなイノベーションに貢献する新しい方法論や手法について学ぶと同時に、参加メンバーの企業が共有する課題について議論を行ってきた。

FTMフォーラムは2013年度も、エネルギーを中心とするテクノロジー、社会、そして企業という観点から、産学共同の研究と議論を続けていく考えである。とりわけ2013年度は、スマートな日本モデルの提案を念頭に置いて活動を進めたい。